

綾瀬川の河岸場跡を訪ねて (2009.8)

(花又榎戸河岸跡から岩槻妙見河岸跡まで) 鈴木恒雄



綾瀬川の河岸に対する疑問？

足立区の東部を貫流する綾瀬川の舟運は、その流域周辺の歴史を考察する上でも重要な意味をもっている。

1、江戸時代において、なぜ綾瀬川筋は大河ではないのに物資の重要な輸送ルートとして活躍できたのか？

2、どうして、昭和30年代(1950年代)まで舟運が利用可能であったのか？

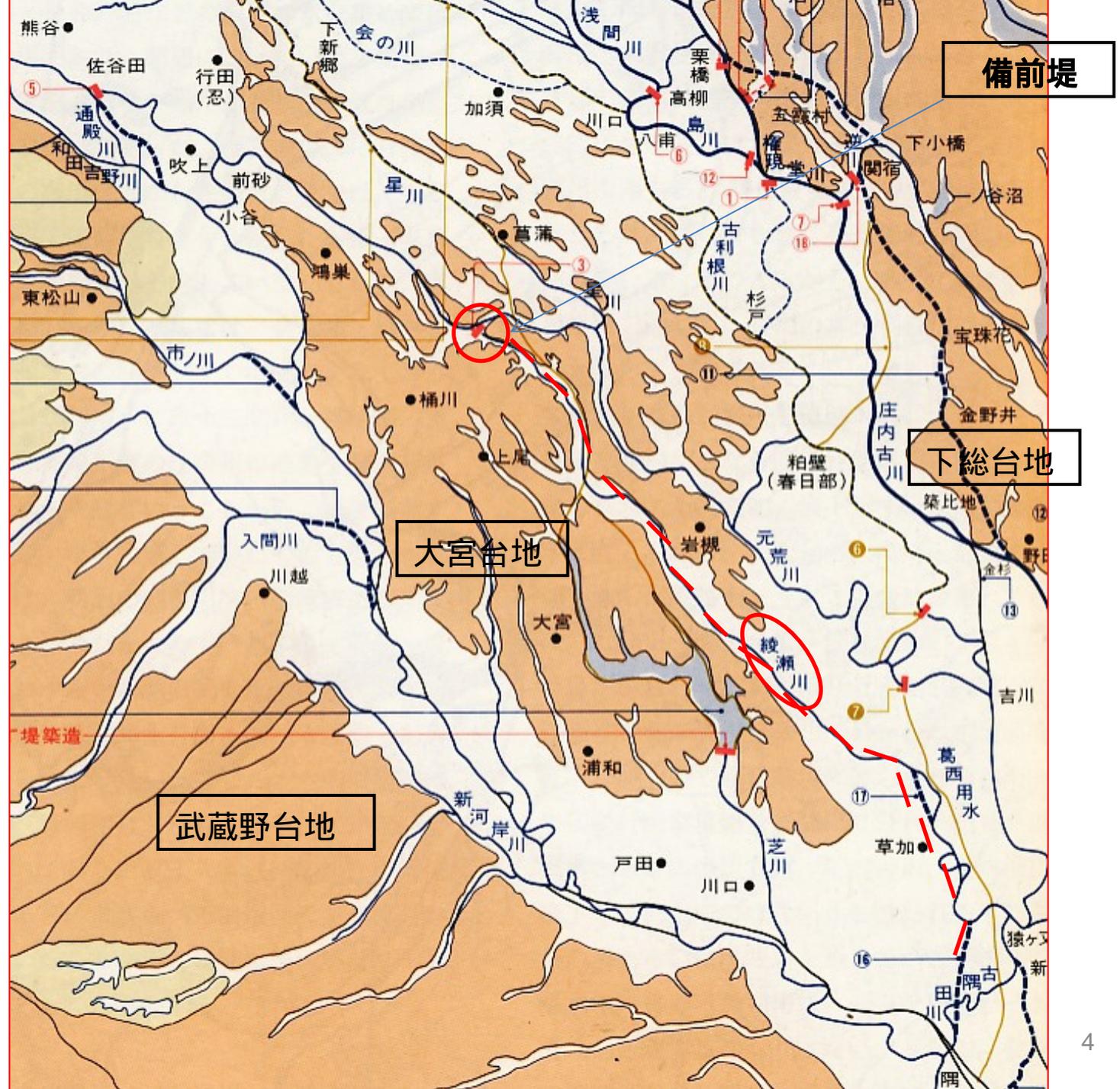
作業仮説として以上の設問を設定してみた。

*** なお、使用した地形図は明治時代に作成された古地図・古写真をもとに、以上の点を中心にして、河岸の歴史をたどってみることにする。**

使用地図は2万分1迅速図及び2万分1地形図であり、大正末から昭和初期に行われた河川改修がまだなされていない時期のもので、舟運がまだ盛んであった頃のものを使用している。

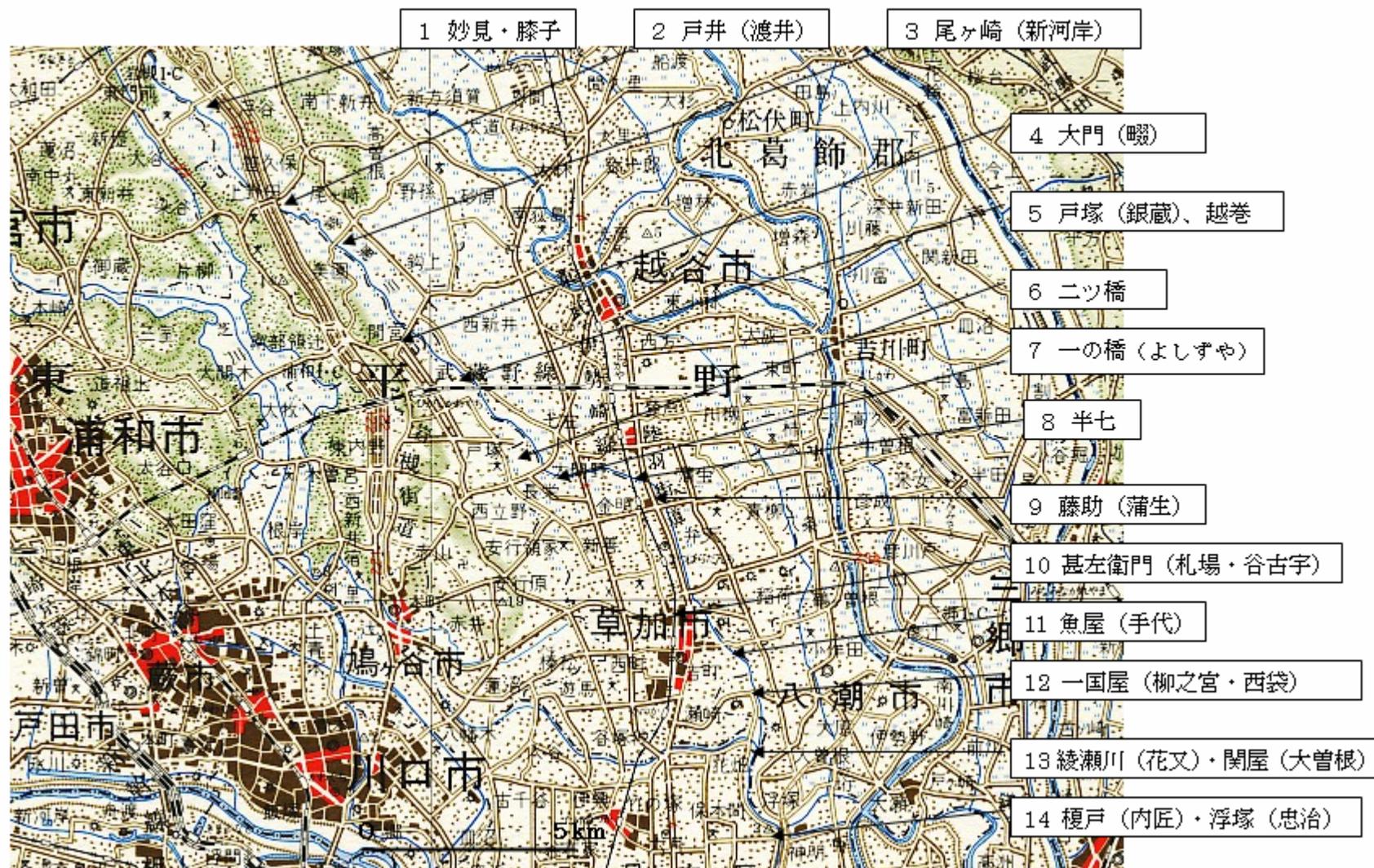
綾瀬川の旧流路

大熊 孝
(1981)
アーバン
クボタNO19



第1図 綾瀬川主要河岸位置図

原図は20万分の1地勢図 東京

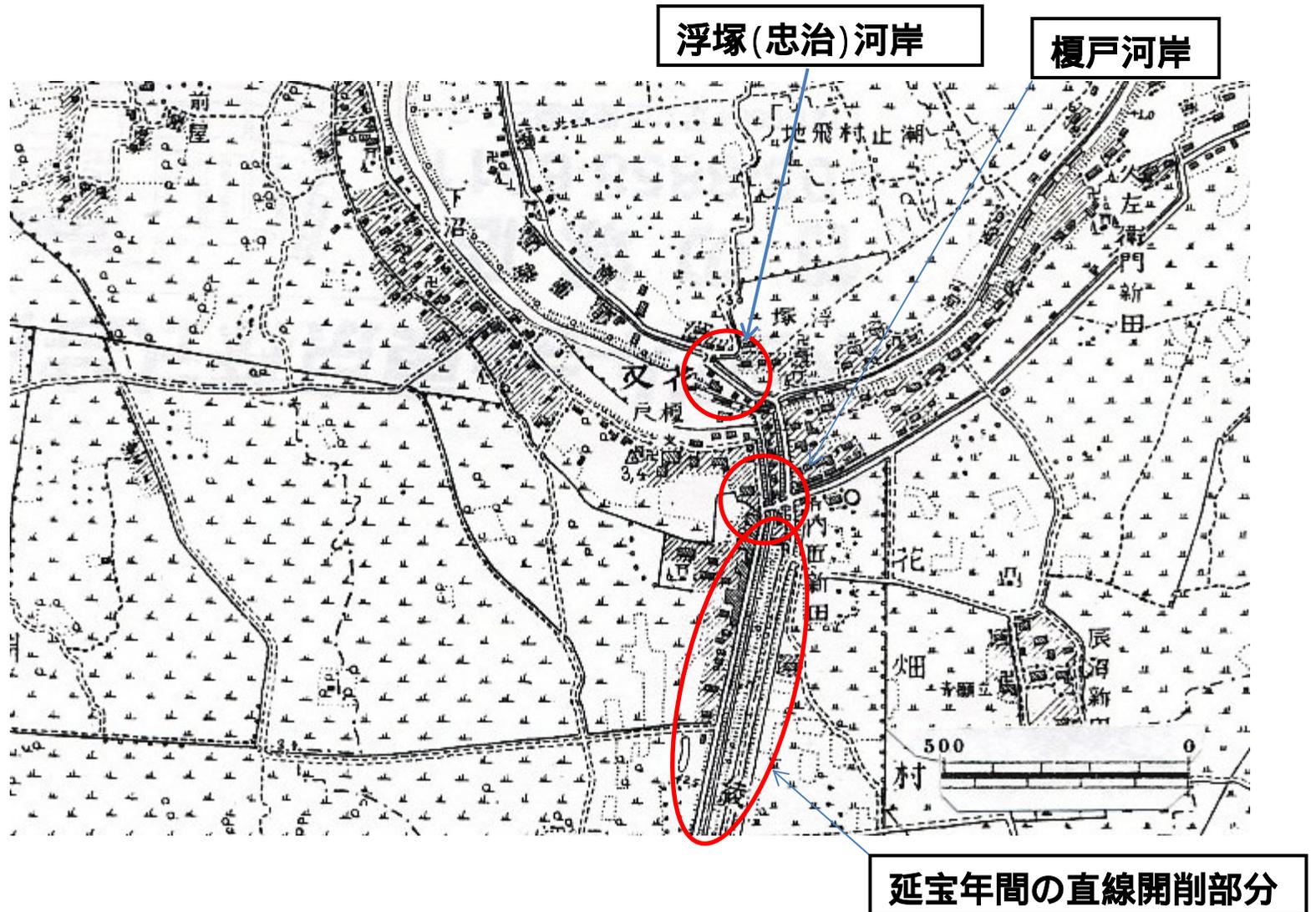


綾瀬川の主要河岸一覧

妙見河岸より榎戸河岸まで

NO	河岸名	日本産業 大系	岩槻市史	越谷市史	草加市史	川名 登 (2003)	川名 登 (2007)	綾瀬川の 水運1991
1	妙見、膝子	○	○	○		○	○	○
2	戸井							○
3	尾ヶ崎(新河岸)	○	○					○
4	大門(暇)	○	○			○	○	○
5	戸塚(銀蔵)、越巻	○	○	○		○	○	○
6	二ツ橋				○	○		○
7	一の橋(よしずや)				○			○
8	半七			○	○		○	○
9	藤助(蒲生)	○		○	○	○	○	○
10	甚左衛門(札場、谷古宇)	○		○	○	○	○	○
11	魚屋(手代)	○			○	○	○	○
12	一国屋(西袋)							○
13	綾瀬川(花又)、関屋(大曾根)				○			○
14	榎戸(内匠)、浮塚(忠治)	○				○		○

榎戸(内匠)・浮塚(忠治)河岸跡 (1910年頃)



榎戸河岸、内匠橋の今昔の様子

内匠橋 1947年(昭和22)



内匠橋 2002年(平成14)



ブックレット足立風土記より

浮塚(忠治)河岸跡の様子

忠治河岸より南方向
(1955)昭和30年頃



忠治河岸より南方向(2009)



ブックレット足立風土記より

浮塚(忠治)河岸周辺の様子

小溜井の堰枠開け(1955年頃)



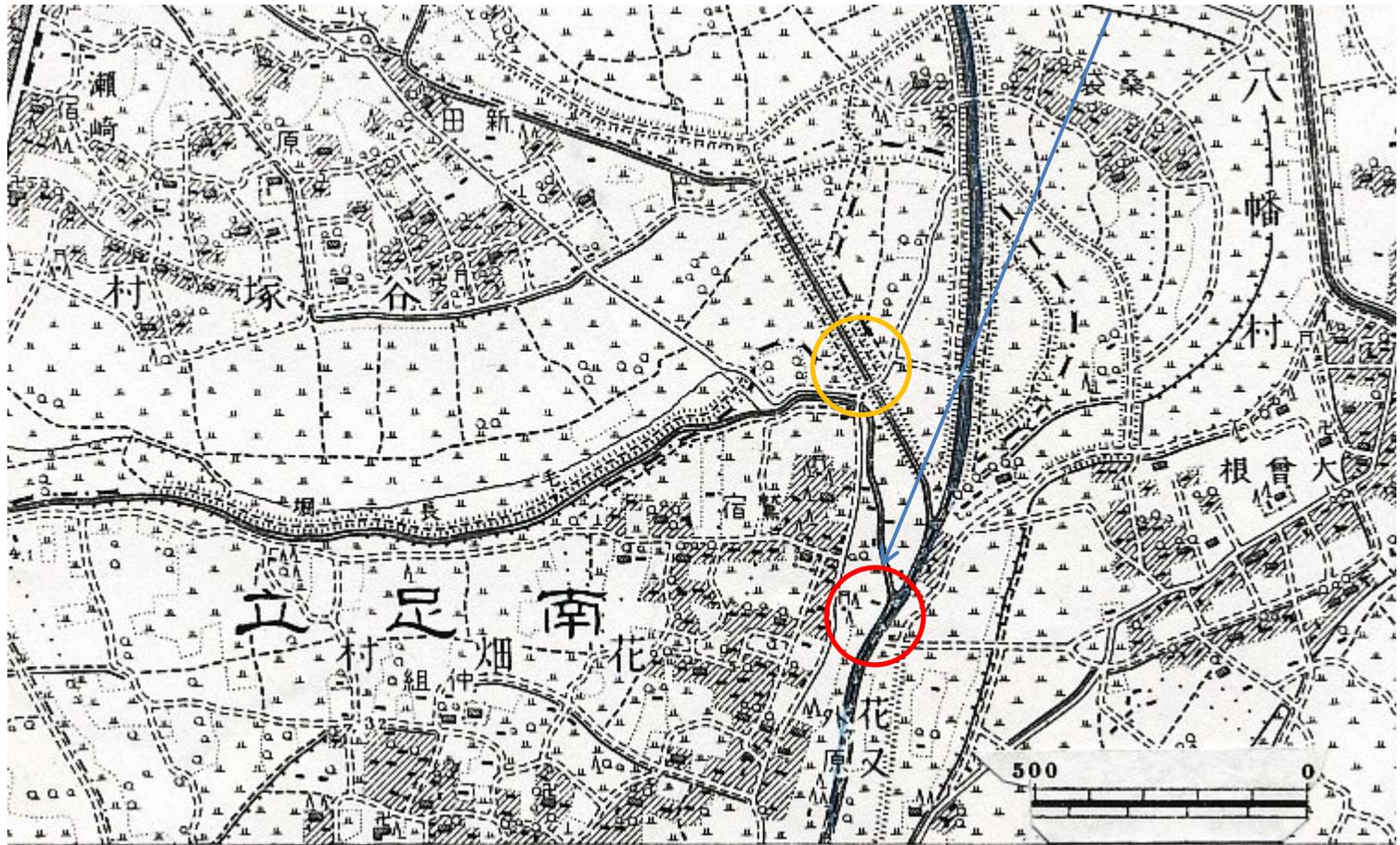
浮塚・忠治河岸跡の水神様(2009年)



地域学習資料 六木・神明の歴史より

綾瀬川・関屋河岸跡と毛長堀

綾瀬川河岸、関屋河岸



綾瀬川河岸跡と毛長堀

綾瀬川河岸(2009年)



毛長堀の堰枠 1920年(大正9)



目にみる草加・越ヶ谷他の100年

綾瀬川河岸周辺の関連施設

毛長堀堰枠 (1961年)昭和36



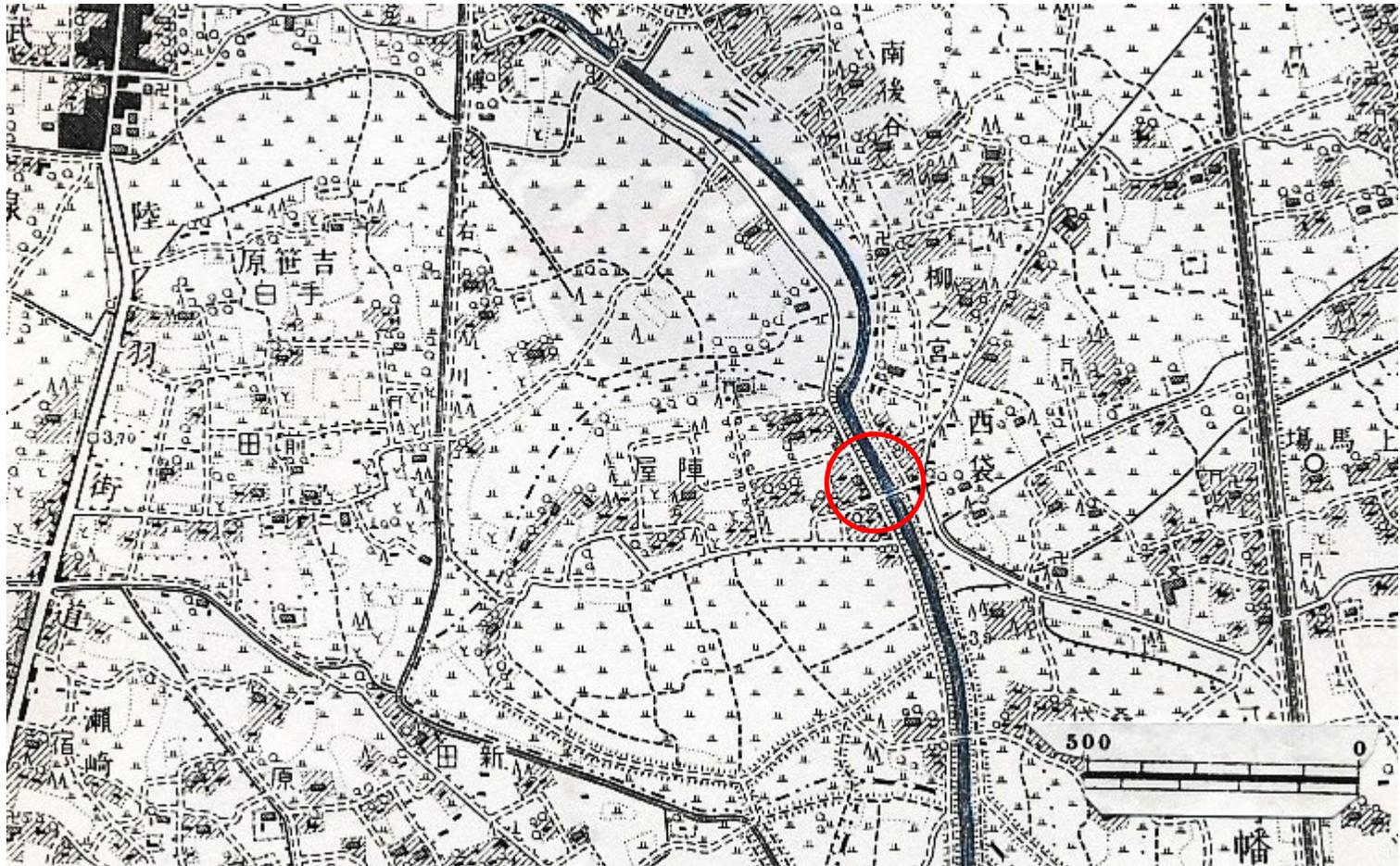
東京慕情 東京新聞社

蛇橋 (1982年頃)昭和47



川に抱かれて 八潮市資料館

一國屋(西袋・柳之宮)河岸跡



柳之宮橋周辺の写真

柳之宮橋上流側 (1966年)



川に抱かれて 八潮市資料館

柳之宮橋上流 (2009年)



下肥運搬舟と下肥の共同溜

綾瀬川の下肥舟(1955年頃)



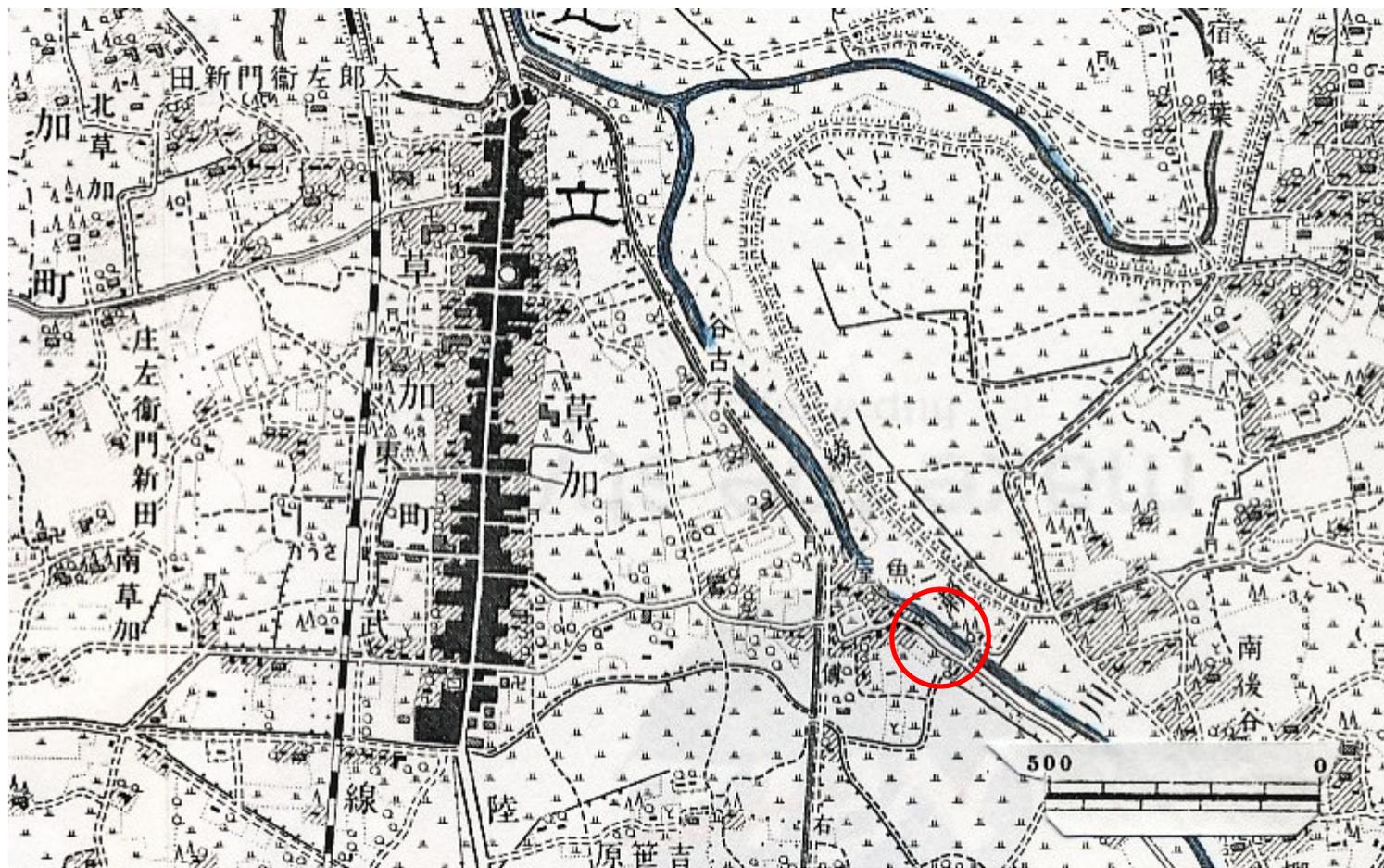
足立の交通 足立区郷土博物館

西袋の共同の肥溜 (1980年)



川に抱かれて 八潮市資料館

魚屋(手代)河岸跡



魚屋(手代)河岸 花又屋の屋敷 (1870頃) 明治初

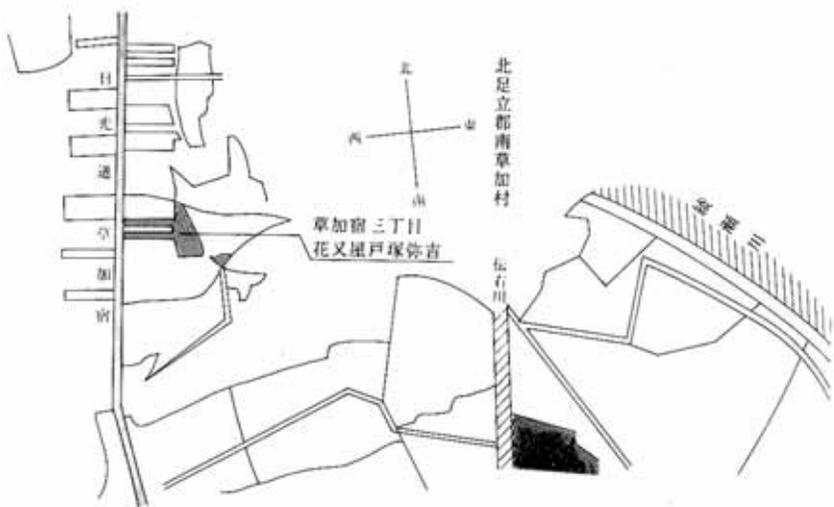
花又屋と河岸

戸塚弥吉の店

花又屋と河岸

佐五兵衛宅

第4表-2 花又屋と河岸(1)



第4表-3 花又屋と河岸(2)



綾瀬川の河岸 草加市研究第2号

魚屋(手代)河岸跡の現状

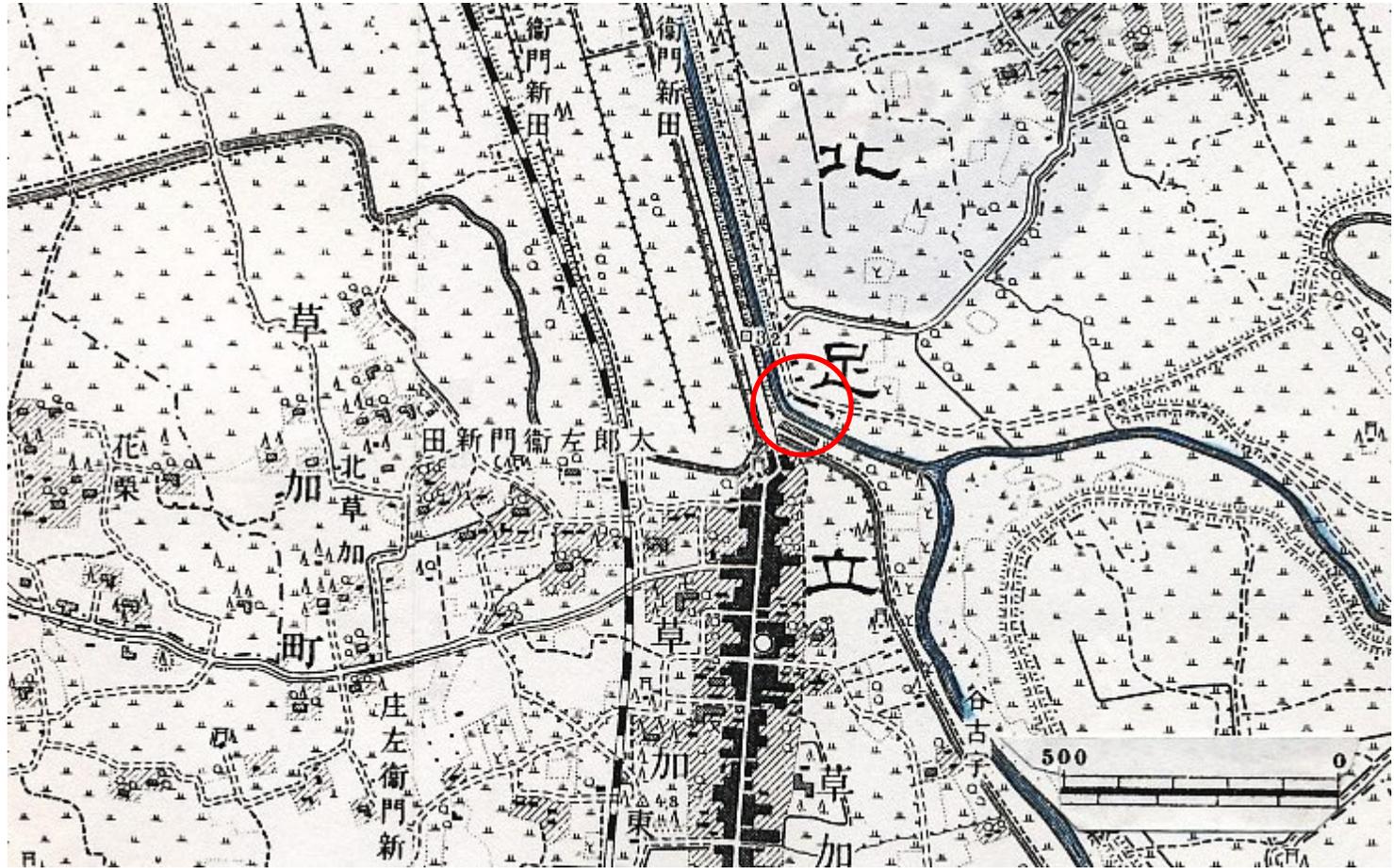
下流よりの手代橋 (2009年)



魚屋河岸付近 (2009年)



甚左工門・札場・谷古宇河岸跡



甚左工門・札幌河岸の現状

札幌河岸の概略図 (江戸末期)



改修後の札幌河岸(2009年)



綾瀬川の河岸 草加市研究第2号

甚左工門堰

甚左工門・札幌河岸跡の現状

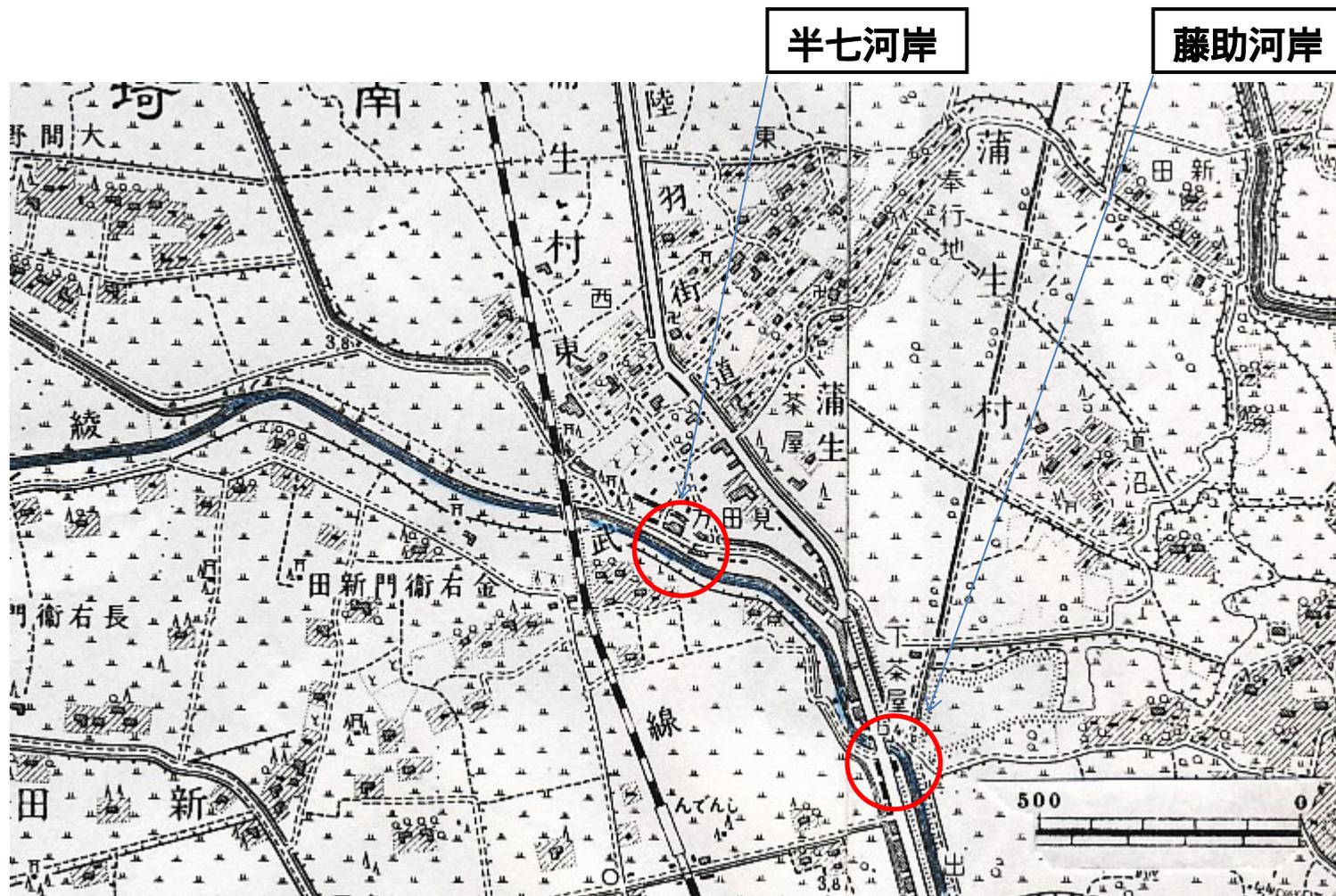
札幌河岸の常夜灯(2009年)



札幌河岸を上流より(2009年)

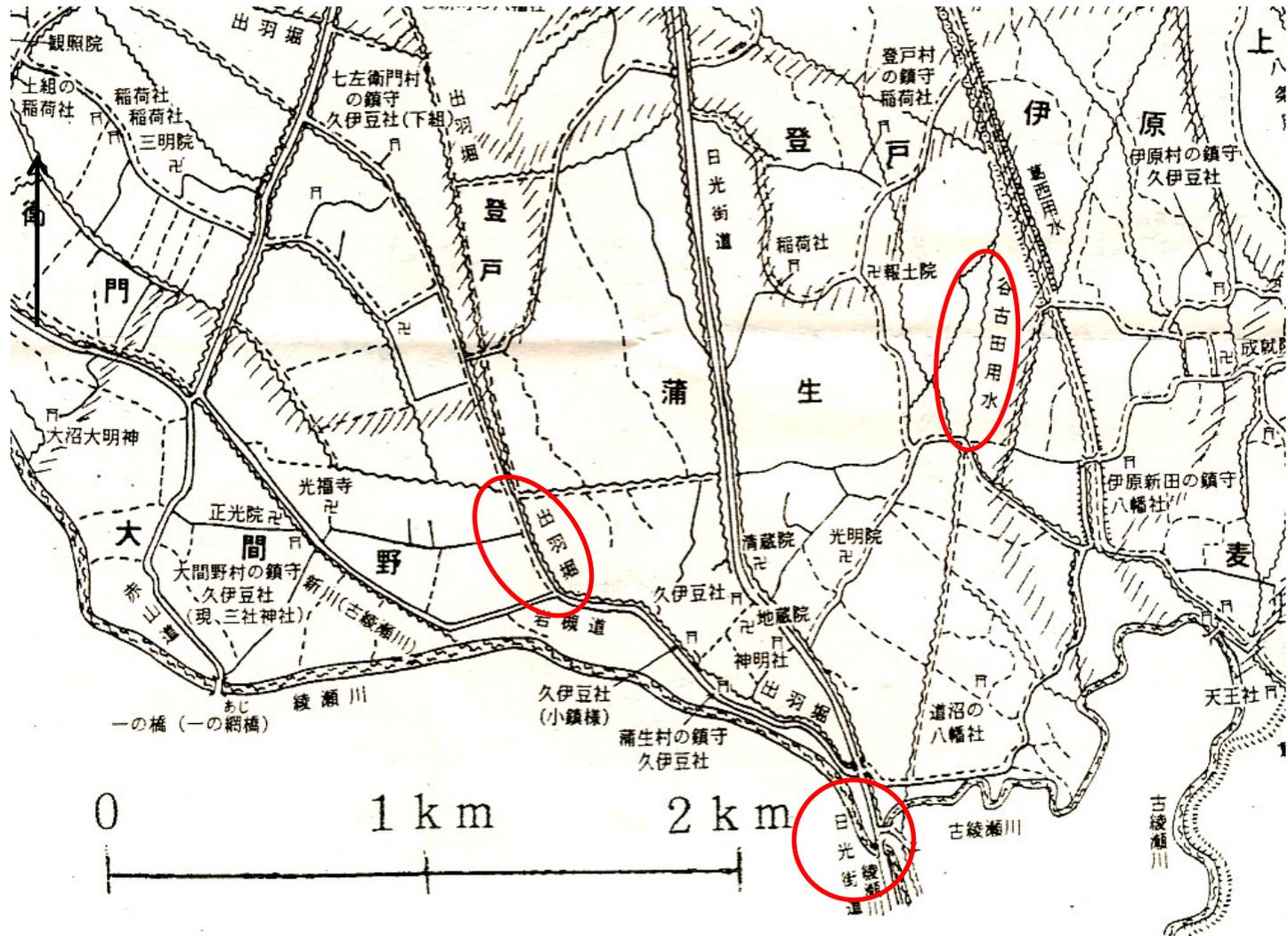


藤助河岸跡・半七河岸跡

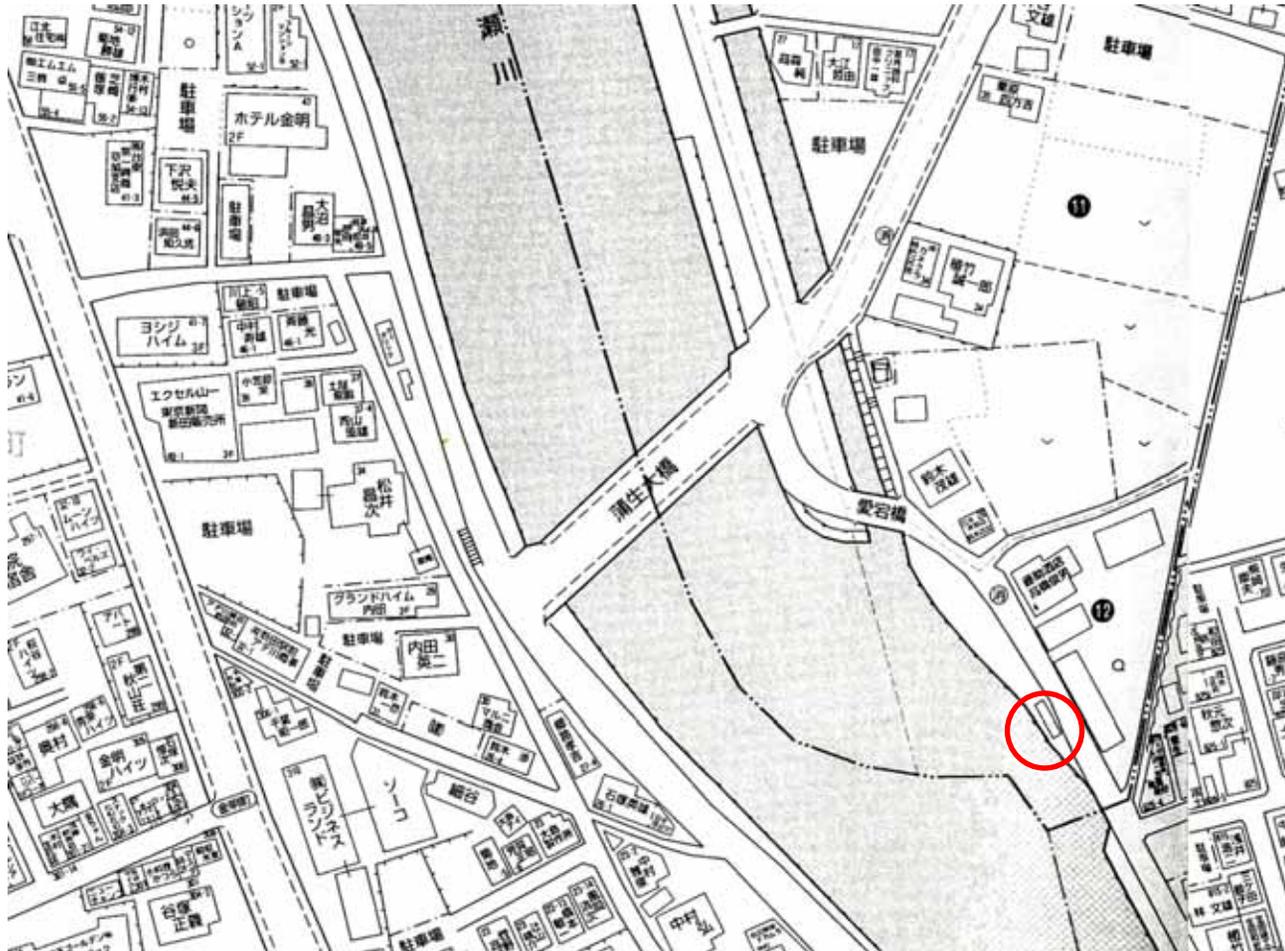


藤助河岸周辺の水路状況

加藤幸一氏の資料による



藤助河岸周辺の現在状況



ゼンリン 住宅地図 草加市 より

藤助河岸周辺の状況

改修前の河岸場(1987年)



改修後の河岸場(2009年)



藤助河岸周辺の状況

藤助酒店の様子(2009年)



出羽堀の綾瀬川への出口(2009年)



蒲生周辺の風景と半七河岸跡

蒲生の一里塚(2009)

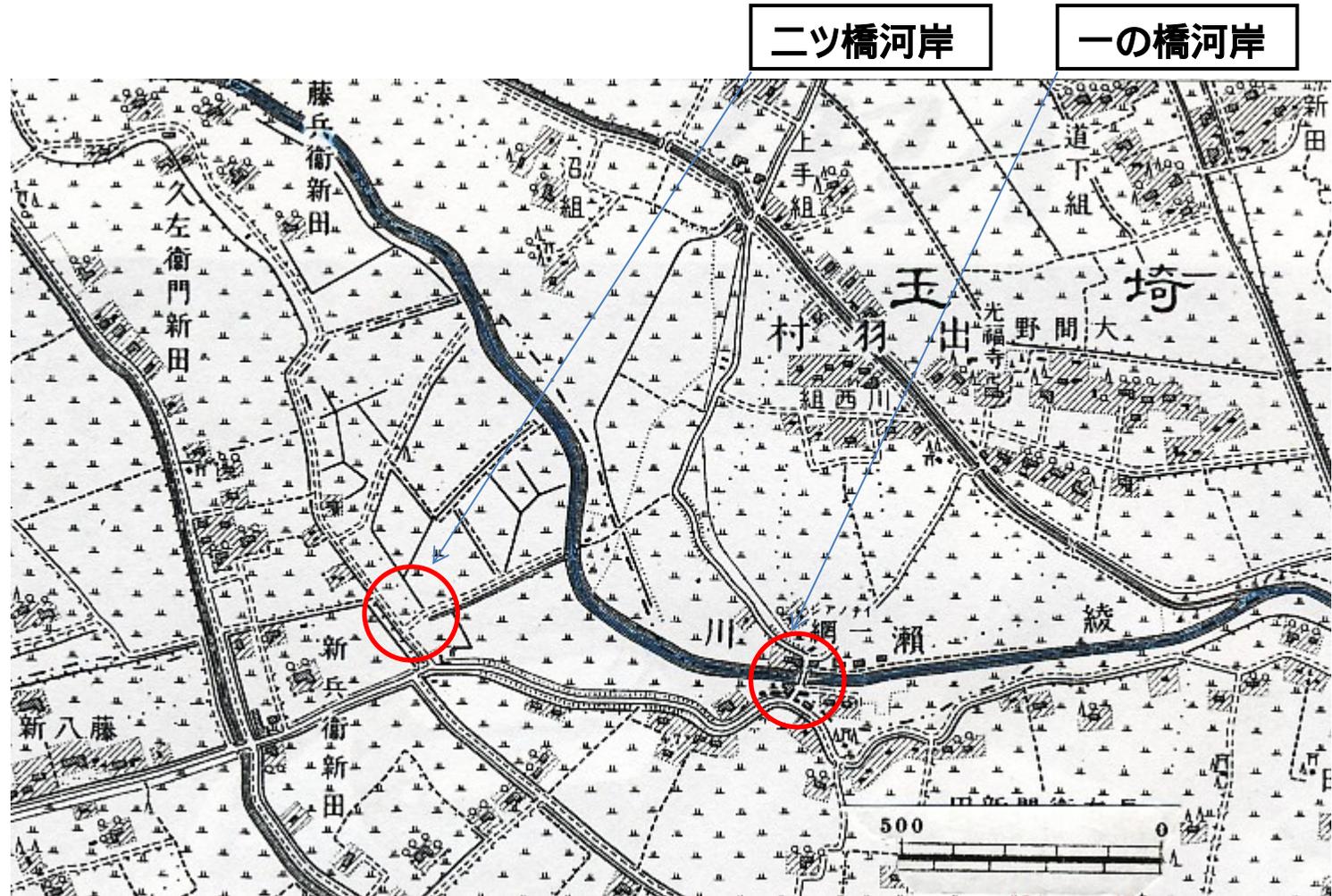


半七河岸跡(久伊豆社前)(1990)



写真集 中川水系 埼玉県

一の橋(よしずや)河岸と二ツ橋河岸跡



一の橋(よしずや)河岸跡

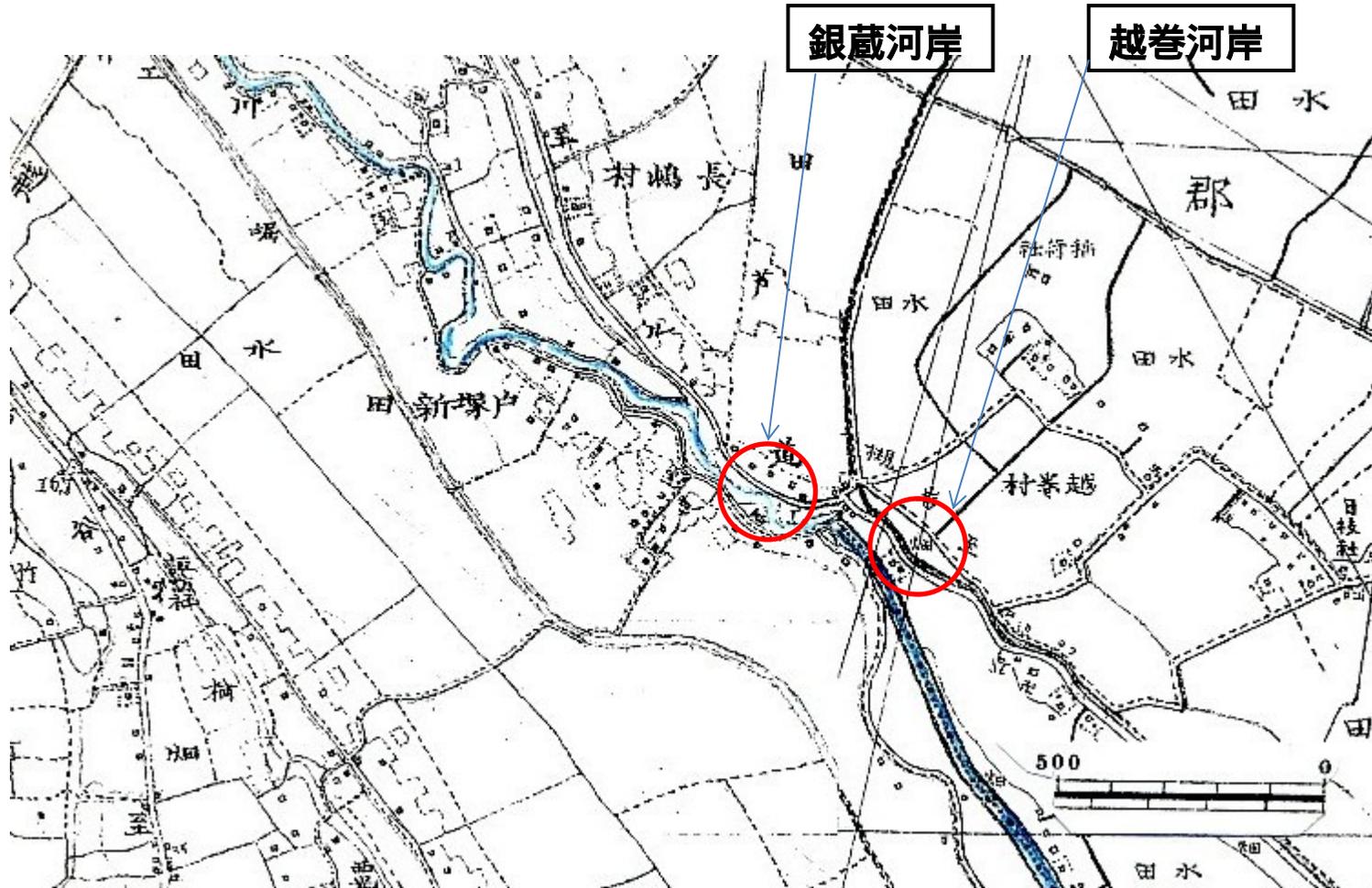
一の橋(よしずや)河岸跡(2009)



草加市内の河岸跡 草加市史より



越巻河岸跡と銀蔵河岸跡



越巻河岸と銀蔵河岸(周辺での最大の河岸)

越巻河岸跡(2009年)



銀蔵河岸跡(2009年)



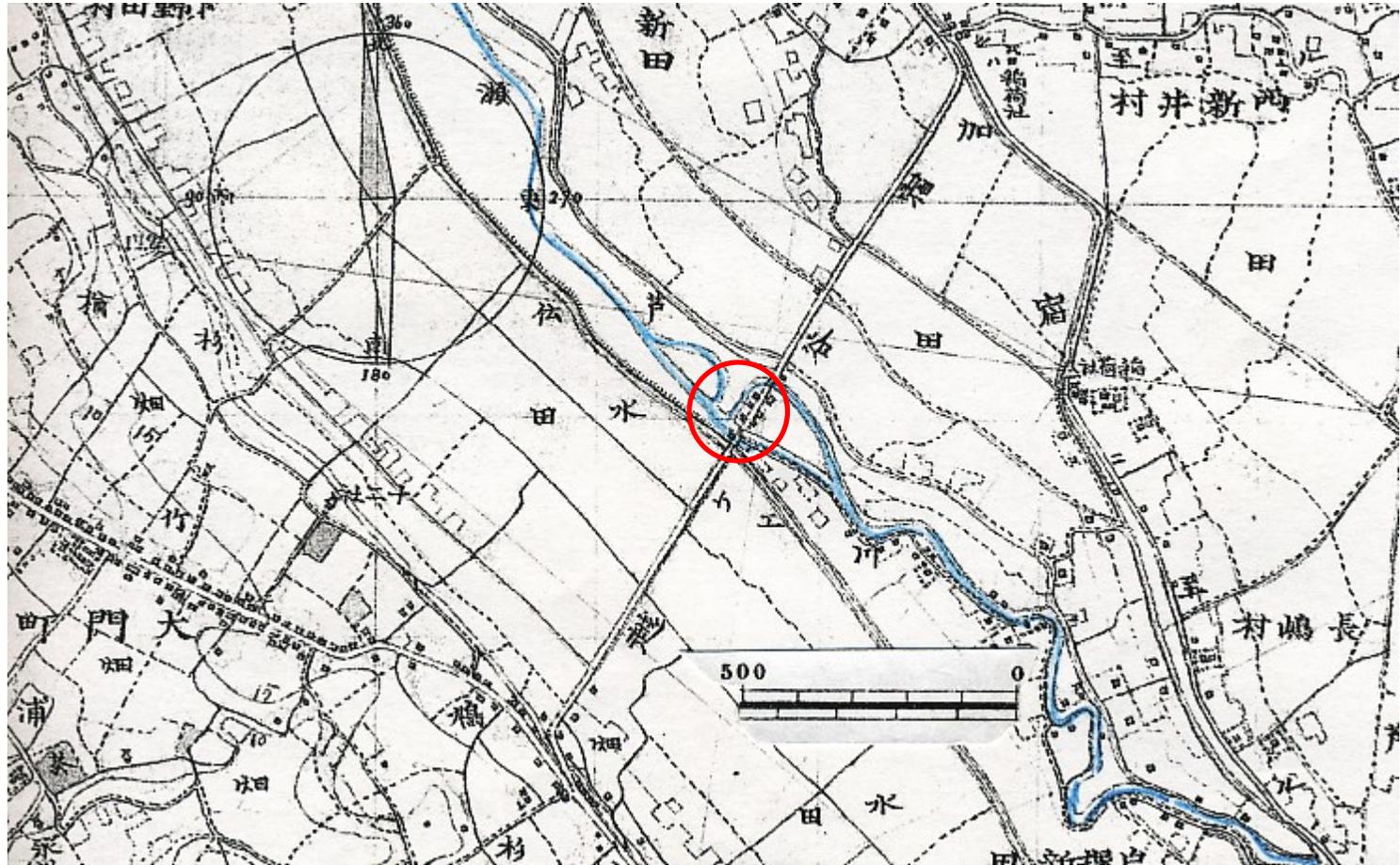
綾瀬川流域の村の荷船の積載・保有状況

川名 登(2003)の資料を読み変えたもの

NO	積載量(石)	50石船	32石船	20石船	15石船	12石船	6.8石船	5.2石船	隻数	現代のトラック換算
	積載量(俵)	125	80	50	37.5	30	17	13		
	トラック換算トン数	7.5t	4.8t	3t	2.25t	1.8t	1.02t	0.78t		
1	妙見河岸?(谷下村)	1	0	2	0	0	0	0	3	10t 1台、3t 2台、
2	妙見河岸(横根村)	0	1	0	0	1	2	1	5	5t 1台、2t 1台、1t 3台
3	銀蔵河岸(戸塚村)	7	0	9	16	0	0	0	32	10t 7台、3t 25台、

妙見河岸と銀蔵河岸では積載量比較で 10t:145t

大門・暇河岸跡



大門・暇河岸跡

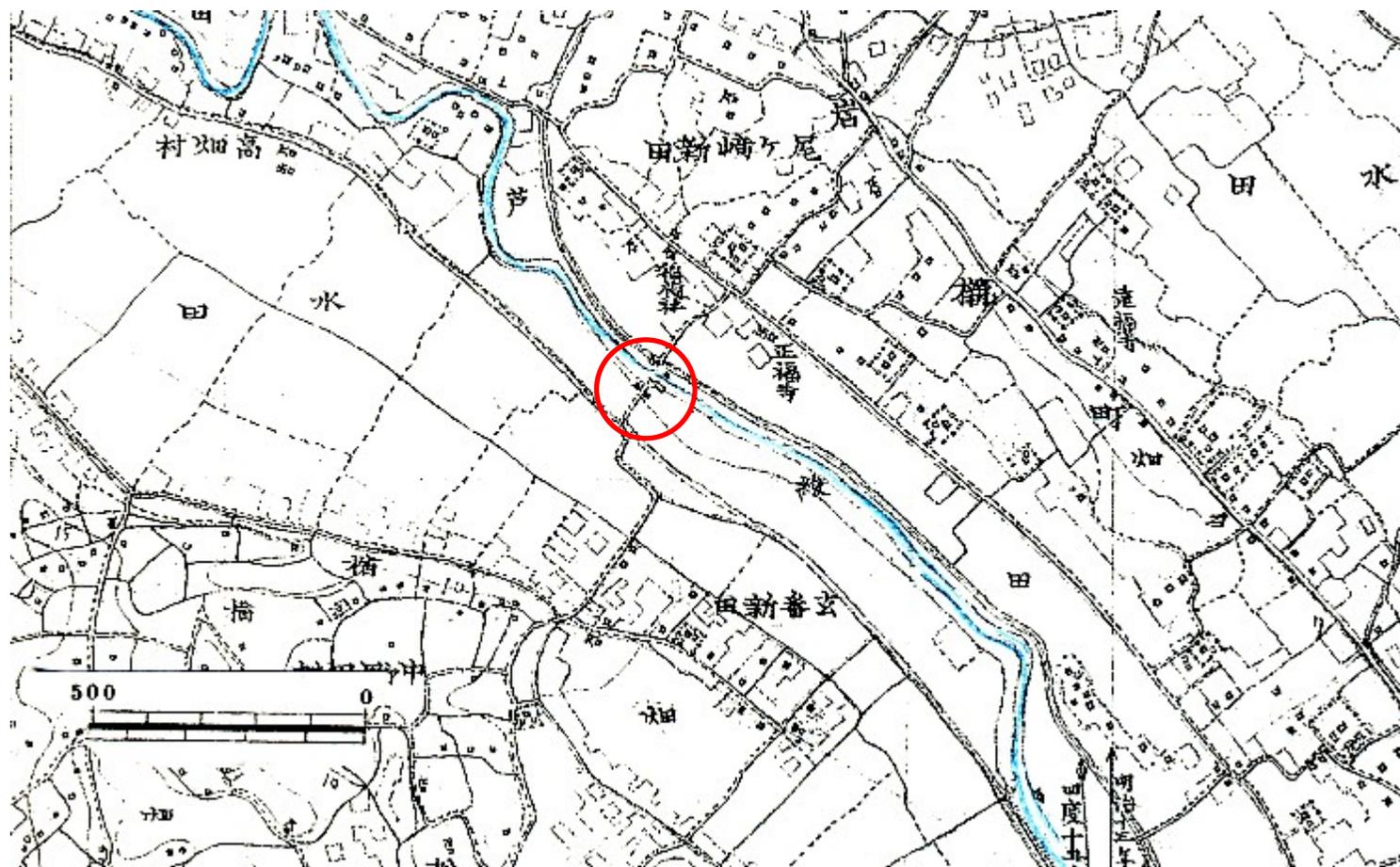
暇橋と河岸場跡(2009年)



ます屋(川魚料理屋) (2009年)



新河岸(尾ヶ崎新田)



新河岸跡(尾ヶ崎新田)

新河岸橋の河岸(2009)



川の手に出入り口のある農家



戸井河岸跡と周辺

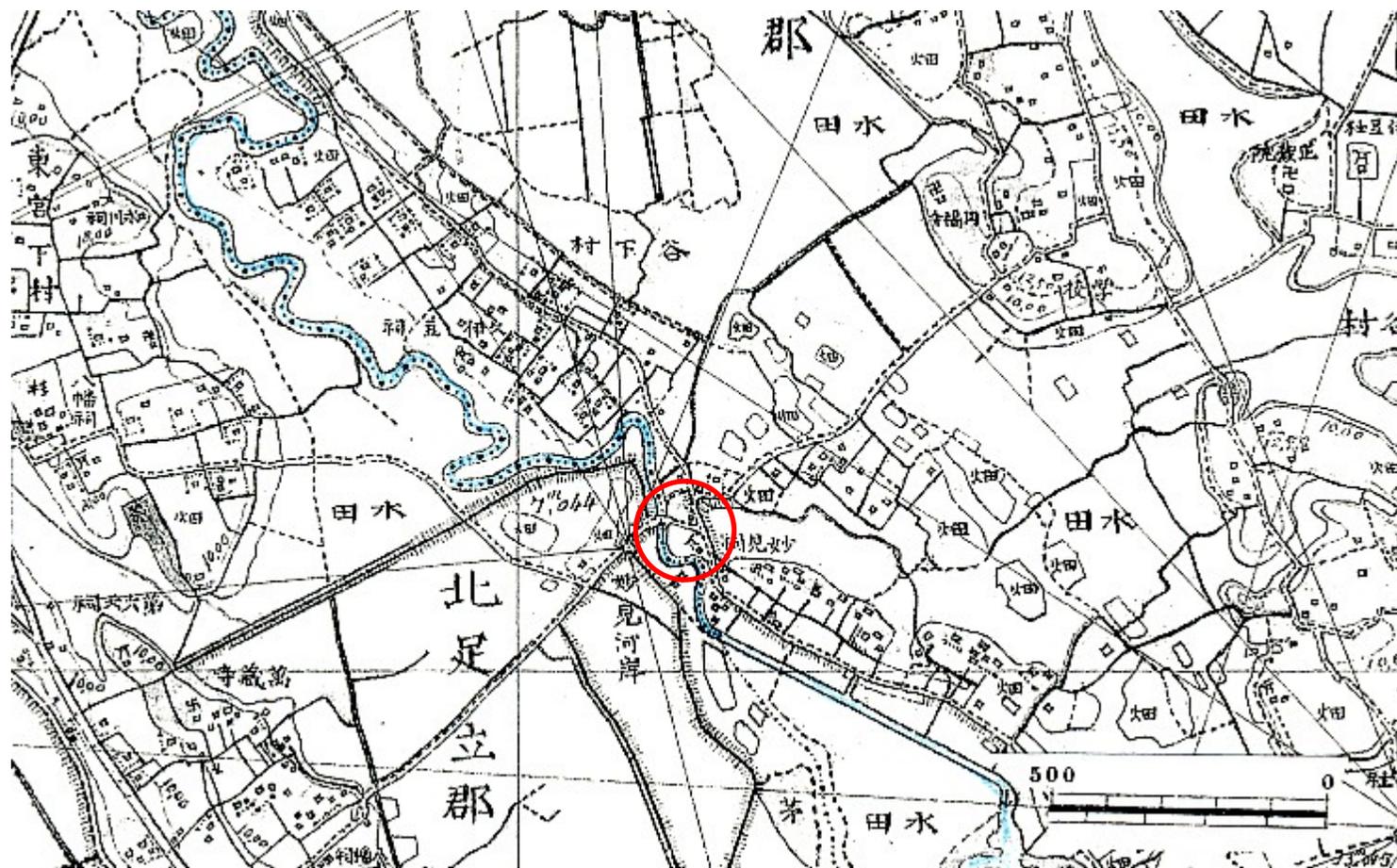
戸井河岸跡(2009年)



尾ヶ崎新田の肥溜跡(2009年)



妙見河岸跡(横根村)



岩槻 妙見河岸付近の現況図



ゼンリン 住宅地図 さいたま市 より

妙見河岸付近の現況写真 (岩槻藩10万石の年貢米積み出し港?)

妙見橋より上流側(2009年)



妙見橋より下流側(2009年)



妙見河岸命名もとになった妙見神社

妙見(北辰)神社の額(2009年)

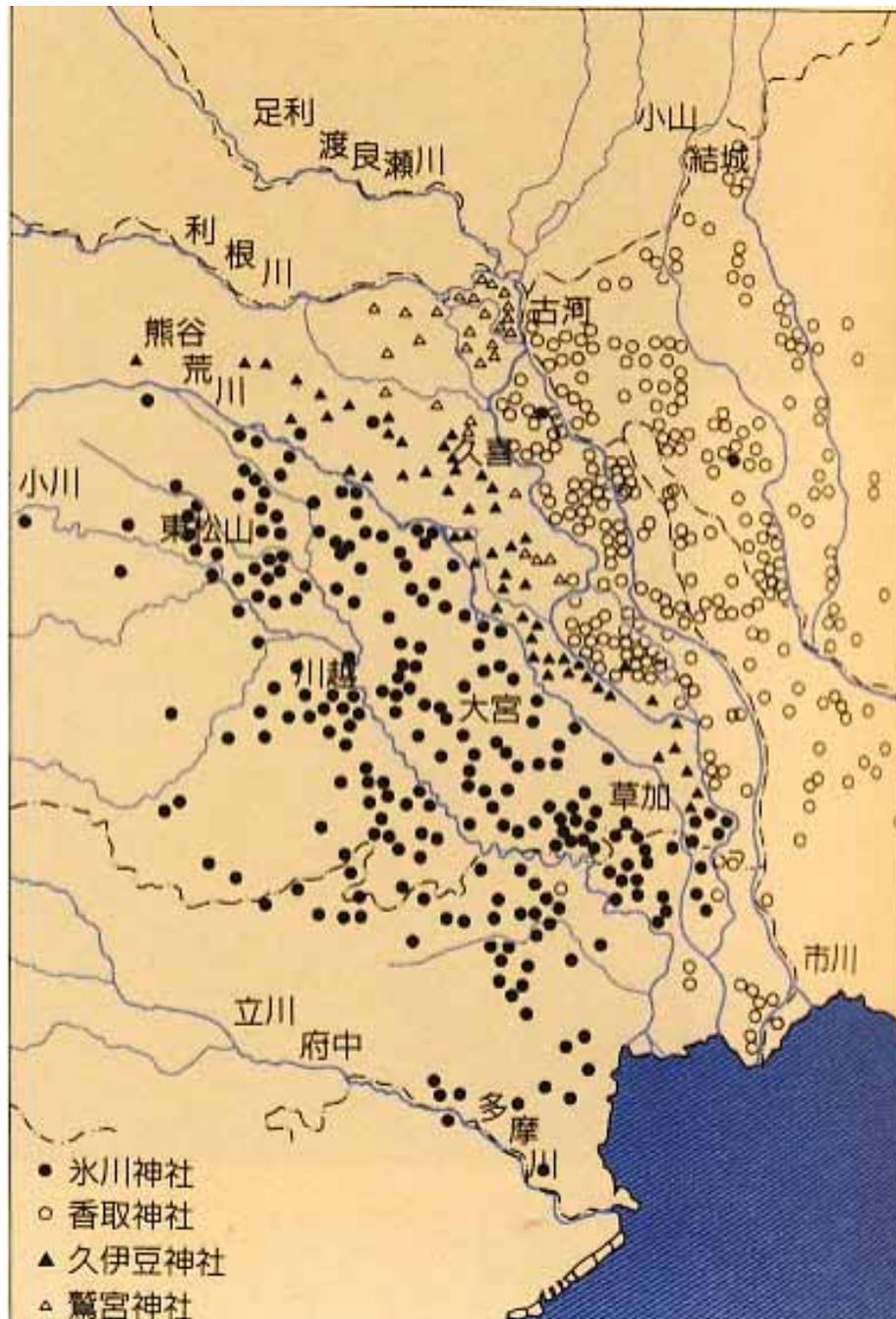


妙見神社の全景(2009年)



流域の神社の分布

西角井正慶氏の資料による



綾瀬川舟運のまとめ

- 1、綾瀬川は秩父盆地からの旧荒川の本流であり、慶長年間以前は、大型の舟も運航可能な大河であった。
- 2、伊奈氏により上流が締め切られ水位が下がり、安定した河川になって舟運や新田開発が可能になった。
- 3、江戸への年貢米の輸送のため、延宝年間(1680)に花又から小菅への直線ルート開削され江戸への直送コースが開かれた。同時に川の堰止め禁止令が出され、これが舟運隆盛の基礎となった。

4、鉄道開通以前に大量に物資を輸送するには、舟運しかなかった。これによる下肥運搬は新田開発の肥料不足解消のため、この河川を遡ることとなった。上り荷は下肥、大豆粕、鯨粕、機械油、塩、花又煉瓦 下り荷は米、小豆、甘藷、木材、炭、柿渋など（1914(大正3年)時点)

5、大正年間でも鉄道と舟運のコストの差は約3倍であり、舟運でも十分に太刀打ちできた。しかも河岸近辺の下肥利用農民にとっては、舟運はドアーツードアーであり効率がよかった。

以上が舟運が重要視され、1950年代(昭和30年代)まで続いた主な理由であったと考えられる。

綾瀬川の河岸場跡を訪ねて

P・P説明用資料 2009.07.16作成

- 01 綾瀬川の河岸場跡を訪ねて スライド背景は今回発表する河岸の中の最上流部に位置する、江戸の北の要衝「岩槻藩10万石」の妙見河岸跡の写真である。
- 02 綾瀬川の河岸に対する疑問点 読み上げ
- 03 同上
- 04 綾瀬川の旧流路図 本来は荒川の本流であった。慶長年間に栢間地点の備前堤で堰止められた。
- 05 関東平野中央部の河岸の分布 この楕円赤丸部分を調査した。(原図は日本産業大系より)赤点線は花又(榎戸)～小菅までの延宝年間の開削部分。これにより、綾瀬川筋の年貢米の船が直接、浅草、蔵前へ直行することになった。
- 06 綾瀬川の河岸の分布(14箇所読み上げ) 調査対象を下流の榎戸河岸から上流は岩槻横根村の妙見河岸までとしたのは、大正時代の河川改修までは妙見河岸には用水堰があり、船はそれ以上遡上するのは無理であったことによる。
- 07 調査対象の江戸から明治時代にかけての代表的河岸の一覧表14か所、これは主として流域自治体の市史等に記載されている主要な河岸から選定した。
- 08 榎戸(内匠)河岸と浮塚(忠治)河岸の2万分1地形図を拡大したもの、今回の調査では地形図は全てこの2万分1とした。それは、調査場所の情報が同一精度で比較できるためである。また使用した写真は基本的に撮影対象を下流側より撮影している。このスライドでは下流側の河岸より話を進行させる。
- 09 榎戸河岸の1935年(昭和10)時点での概略図、河岸に関係した店が見られる。この内匠橋付近はかつて花畑村の中心であった。
- 10 榎戸河岸の内匠橋の変遷 左は1947年(昭和22)と右は2002年(平成14)の比較、対岸の橋のたもとが河岸であった。
- 11 浮塚 忠治河岸の変遷 戦後と現代の様子、左写真下の角材の列は流域の木造船の製造を一手に引き受けていた清水船大工のドックであると思われる。

- 12 近くの小溜井の枠開け風景と河岸の水神様、ため池は水質保全のために年に2回程度水を落としていた。子供も大人も魚とりに興じた。
- 13 都県境を流下する毛長堀と、合流点にあった綾瀬川河岸付近の地形図赤丸は毛長堀の堰枠、黄丸は下肥河岸。
- 14 綾瀬川河岸の変遷 現代の様子。対岸が関屋の河岸(ここには地場産業の帝国煉瓦があった。1918年(大正7)設立)。右は大正時代の毛長堀堰枠の様子。
- 15 戦後、毛長堀の改修によって築造された堰枠、右は悲しい伝説のある綾瀬川に架かる蛇橋
- 16 一国屋河岸と柳之宮・西袋付近の地形図(現在、一国屋の後継者、小沢製粉は一国印白玉粉を製造中)
- 17 柳之宮橋上流付近の変遷(一国屋河岸は明治期に月に千俵の米を出荷した?)
- 18 下肥船と積み下ろしの風景、右は八潮西袋の下肥の共同溜、船頭は河岸に着船すると、溜に下肥を投入して貯留した。肥船は渡し板1枚あれば、どこでも荷をおろせた。流域の農民にとって、いわば肥料運搬のドアーツードア方式
- 19 魚屋(手代)河岸付近の地形図
- 20 魚屋河岸は流域でも屈指の河岸であった。幕末この河岸を利用した花又屋の戸塚弥吉宅の店と河岸の佐兵衛屋敷の概略図、花又屋は草加宿16人衆の一人。
- 21 手代橋下流から上流を望む。河岸はこの橋の上流にあった。右は河岸の付近
- 22 甚左工門(札場、谷古宇、高瀬ともいう)河岸付近の地形図、綾瀬川に並行する伝右工門川は綾瀬川の国道に対して、地方道の役目をはたしていたらしい。
- 23 草加宿北の札場河岸の江戸末期の見取り図、札場(甚左工門)河岸と高瀬河岸が共存している。また、ここにある甚左工門堰を利用して綾瀬川と伝右工門川は相互に通行ができた。右は復元された札場河岸である。
- 24 札場河岸の常夜灯と河岸上流側から見た札場河岸の全景
- 25 蒲生の藤助河岸と半七河岸周辺の地形図、草加松原から先は曳き船となった。
- 26 藤助河岸周辺の古道と用排水路、さっぱ舟程度が通行可能な水路網が藤助河岸に収束している。(藤助河岸と谷古田用水と出羽堀の位置を確認する。)
- 27 藤助河岸周辺の住宅地図、1986～1990年(昭和61～平成2)の洪水対策のための大規模な河川改

修により、この付近の流路幅は大幅に拡張された。

28河川改修前と改修後の藤助河岸

29 藤助酒屋と出羽堀の出口(出羽堀は越谷南部の悪水落としである)

30 藤助河岸上流にある蒲生の一里塚、右は半七河岸(荷捌き量は大きかった)

31 一の橋(よしずや)河岸と二ツ橋河岸付近の地形図。「よしずや」(屋号)とはこの河岸よりよしずを出荷していた。二ツ橋は市街地化したために写真なし。

32一の橋(よしずや)河岸の現況写真、右は草加市内の河岸の分布図

33 越巻河岸と銀蔵河岸付近の地形図 銀蔵河岸はこの付近でも屈指の河岸であった。この地図を見ても下流からここまでの河川の幅が広がっている。

34 越巻河岸と右は銀蔵河岸の現況写真

35 明治初年に流域の村が保有する荷船の状況、最上流の妙見河岸と銀蔵河岸の船の保有状況の比較表。これは現在のトラック輸送に換算した表である。妙見河岸付近は川が細流となるため小型トラックが輸送の中心(総積載量10t)であるのに対して、銀蔵河岸は10tトレーラー7台、3tトラック25台(総積載量145t)貨物の総積載量の両者の比較で約1:15で銀蔵河岸は現代でいう大型トレーラーのターミナル的規模であったと思われる。

36 大門、躰河岸付近の地形図

37 大門、躰河岸跡と右は橋のたもとに昔からある川魚料理屋の写真、ここでも綾瀬川と伝右I門川は近接している。

38 尾ヶ崎新田の新河岸付近の地形図

39新河岸橋付近と右は川の手に入り口をもつ農家の様子

40戸井河岸付近の地形図

41戸井河岸跡と右は尾ヶ崎新田の肥溜めの写真

42妙見河岸付近の地形図、橋の位置は昔と変わらず。この橋付近に用水堰あり。

43妙見河岸付近の住宅地図 赤丸は橋、黄色丸は妙見神社(北辰社)。妙見様は中世豪族千葉氏の守り神、船乗りの神様でもあり、日蓮宗の妙見菩薩でもある。

44妙見河岸上流側の写真、右は下流側のもの。

45妙見河岸の元となった妙見神社の額「北辰社」、右は社、起源はどこか？

46流域の神社の分布 越谷周辺では元荒川以東は香取社、元荒川と綾瀬川との間は久伊豆社、綾瀬川以西は氷川社、妙見社は荒川水系では秩父神社がある(旧秩父大宮妙見)

47-48綾瀬川の舟運のまとめを箇条書きごとに読み上げる。

綾瀬川はかつての秩父盆地からの旧荒川の本流であり、慶長年間以前は、大型の舟も運航可能な大河であった。

伊奈氏により綾瀬川上流が締め切られ水位が下がり、安定した河川になって舟運や新田開発が可能になった。

江戸への年貢米の輸送のため、延宝年間(1680)に花又から小菅への直線ルートが開削され江戸への直送コースが開かれた。同時に川の堰止め禁止令が出され、これが舟運隆盛の基礎となった。(元荒川などは河川途中で用水堰があった。)

鉄道開通以前に大量に物資を輸送するには、舟運しかなかった。舟運は日用物資の輸送のみならず、これによる下肥運搬は新田開発の肥料不足解消のため、この河川を遡ることとなった。1913年(大正2)の舟運の商品リストでは上り荷で、大豆粕、鰯粕、機械油、陶器、塩、人造肥料、他に花又煉瓦などがある。基本的には下肥が中心と思われるが、これは記録に残っていない。下り荷では、米(圧倒的に多い)、あとは小豆、甘藷、糠、木材、炭、食用油、他に柿渋など(柿渋の用途は漁網の防腐剤、油紙、番傘の紙、染物型紙など他用途に使用された。)

大正年間でも鉄道と舟運のコストの比は1対3で3倍であり、舟運でも十分に太刀打ちできた。しかも河岸近辺の下肥利用農民にとっては、舟運はドアーツードアであり効率がよかった。

以上、舟運が重要視され、1950年代(昭和30年代)まで続いた主な理由であったと考えられる。

* 46-47では見沼代用水の完成が享保13年(1728)、堰止め禁止令が延宝8年(1680)なので、差引き50年間、綾瀬川西岸の農民は用水に苦労したことになる。

作成者 鈴木恒雄 (足立区立郷土博物館 展示解説ボランティア)